

生きる力を培う幼・小・中一貫した新教育課程の創造

（共同研究校：香川大学教育学部附属幼稚園・附属坂出小学校・附属養護学校）

[■研究の概要について](#)

[■総合学習について](#)

[■共通学習（必修教科）について](#)

[■選択教科について](#)

 [TOPへ](#)

■はじめに

本校では平成12年度より、文部科学省の研究開発指定を受け、附属幼稚園・附属坂出小学校および附属養護学校との連携により異校種間の協力指導を通して、幼稚園・小学校・中学校の12年間にわたる一貫教育をめざした「生きる力」を培う教育課程・指導法の研究開発に併せ、今日的教育課題である学習不振・困難がある子どもたち（LD児を含む）の指導法に関する共同研究に取り組んでいます。

平成13年度は、昨年の基礎研究で得た成果と課題をもとに、12年間のカリキュラムを具体化すべく授業実践を中心に研究を進めています。そして、教員の異校種間相互派遣（スクール・シャトル・プログラム）による指導経験を活かした研究授業や小学生と中学生との交流学習による授業などを、広く公立校の先生方にも公開いたし、授業参観に加え、研究討議にも参加していただき、貴重なご意見とご指導を賜りました。

私どもは、21世紀が求める「生きる力」をもった個性豊かな子どもたちの成長を図っていくうえで、段差のない一貫教育カリキュラムの構築がきわめて大切であると考えています。今後とも本校の教育研究への温かいご理解とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

■研究の概要

◆研究開発課題の設定理由

これからの教育では、豊かな個性を伸ばしていくことが求められている。今まで坂出学園として、附属幼稚園、附属坂出小学校、附属坂出中学校、附属養護学校は、教育方法等改善に関する共同研究に取り組んできた。この視点に立って、これから新しい教育に向けてより一層、一貫教育を推進すべく、新しい教育課程の創造を目指したいと考える。

幼稚園から中学校まで12年間の成長を個に即して考え、時代の求める生きる力をもった個性豊かな幼児・児童・生徒の育成を図っていく。そのための研究の基本として、幼稚園、小学校、中学校の一貫教育（段差のない教育）を行う。そして、一貫教育の視点から、現在の幼・小、小・中の段差を解消する新しいシステムを提案するものである。

また、幼稚園をはじめ小・中学校的教科の学習において、発達段階で学習不振・困難がある児童（LD児を含む）については、養護学校や大学との連携をもとに、個に対応した指導方法を研究開発していく。

◆研究のねらい

子どもの教育は、その発達に即し連続した営みの中で、意図的に行われるべきものである。教育を一貫した流れの中で的確に行う必要性はそこにある。そこで、幼稚園、小学校、中学校の一貫教育を通して、生きる力をもった個性豊かな幼児・児童・生徒を育成するために、異校種間の教員の協力指導による指導法の研究開発を行う。そのために、以下のことについて研究を進めていく。

■総合学習について

経験を統合し、よりよい生き方を創造する総合学習（小・中共通テーマ）「現代的課題領域」「学校文化領域」「生き方領域」の3領域を融合した本校の最も総合化された教育課程が総合学習である。総合学習は、教科（基礎的・基本的な内容、態度を培う学習）や選択（問題解決的学習の方法を具体的に体験し、学び方を結びつける学習）で身につけた学びを駆使し3領域の中で発見した現実的・複合的諸問題に主体的に取り組む学習である。

○1年：文化分科会（歩く日の共有体験を生かし）

各自が聖通寺山付近の歴史や文化について、フィールドワークを通して得られた情報を新聞記事に表現し発信するために、新聞記者との交流を通して記事内容や表現方法を吟味しコンピュータを効果的に使って編集する学習

○2年：自然分科会（五色台集団宿泊学習や歩く日の共有体験を生かし）

私たちの生活する坂出の自然が今どうなっているかを川・海・池・山の各フィールドワークを通して各自が課題を追究し、郷土の自然について自分の言葉で語れるようにする学習

○3年：くらし分科会（修学旅行、長崎や博多の自主研修の共有体験を生かし）

香川の実態を「くらし」の視点から見つめ直し、各自が課題を設定し、フィールドワークを通して追究し、香川のくらしの現状と未来について熱い思いをもって語れるようにする学習

◆現代的課題領域：「さぬき未来学」

- ・自分が生活している地域である郷土を見つめ直し、フィールドをもとに課題追究できる。
 - ・フィールドワークを通して、グループで現地を見聞きしたことを分析し、学習の成果を発信したり交流したりできる。
 - ・生涯にわたって郷土を愛する心をもち、自分たちの生活を豊かにしていくことができる。
- 6月～12月の期間において35時間で運用しており、6月と10月の前期・後期モジュラースケジュール期間に集中して行われる。11月の文化祭での発表会に向けて、各分科会ともに熱心に活動中である。

◆学校文化領域

この学習は、特別活動のねらいを包含した教育課程として位置づけている。学校生活では、学習・生徒会活動・学校行事・部活動など様々な集団活動がある。この中で、日常の生活現実を見つめながら、生徒一人一人が学習経験や生活経験を統合化し、学校文化を創造していくことを目指した体験活動である。

学校文化の特徴が最も表れている学校行事として、本校の「三大祭」である附属四校園合同運動会（9月）、文化祭（11月）、送別芸能祭（3月）をはじめ、歩く日（1、2年）、修学旅行（3年）、集団宿泊学習（2年）などがある。特に、9月の合同運動会に向けて、連合児童・生徒会で共通テーマを掲げ、学園リレー・学園綱引きなどの交流種目や中学校・養護学校・小学校合同のグランドフィナーレを計画している。

◆生き方領域

この学習は、道徳のねらいを包含した教育課程として位置づけている。道徳の学習や人権学習での内容、親子セミナーでのより現実的な話をもとに、自分の生活を見つめ直し、価値ある生き方を考えていこうとする学習である。

「親子セミナー」は、地域で活躍している先輩を招き親子とともに学ぶ会である。本年度は7月にアナウンサーの植松おさみ氏を迎える、その生き方や考え方方に触れることによって将来の希望や夢をもつ良い機会となった。また、12月の「ユニセフ募金活動」において、中学校・養護学校・小学校の交流を計画している。

■ 幼小中一貫教育の新教育課程の開発

- 1 幼稚園・小学校低学年のカリキュラムづくり
- 2 小中の各教科等のカリキュラムづくり
- 3 小中の一貫した英語教育カリキュラムの開発と多言語（スペイン語、中国語）の導入による中学校選択教科（外国語）の充実

■ 学習不振・困難児、学習障害（LD）児の学習指導法の開発・支援システムづくり

- 児童生徒と保護者への啓発、教師の理解の深化
- 対象児抽出方法による分析
- 校内・外の連携システムづくり
- 指導の形態・場面・教材・援助技法等の開発
- 公立校における対象児発見とその後の対応のシステムづくり

■ 平成13年度の研究内容

- 幼小中一貫の新教育課程を開発・実践し、目標や内容、教師のかかわり等の適性について検討し、修正を図る。
- 幼小中に於いて、生きる力の育成の視点から、各教科等の内容や単元構成、系統性について見直し、幼小中12年間の子どもの学びを見通したカリキュラムを開発・実践する。
 - そして、目標や内容、編成の視点等の的確性や題材配列の順序性等について検討・修正を図る。
 - 小学校と中学校において、総合的学習の目標・内容等の系統や身に付けさせたい資質・能力（情報活用能力、コミュニケーション能力）を明確にするとともに、総合的学習と教科の関連を踏まえてカリキュラムを編成し、実践する。
 - 幼小中に於ける一貫した英語活動・教育を実践する。ただし、幼稚園においては、外国語環境を整え、総合的な学びの中で行う。小学校1年から、教科としての英語指導の在り方を探る。その際、文字の導入を工夫するほか、発音や語彙・表現の習得の実態を探る。
 - 中学校の選択教科（外国語）に、スペイン語・中国語を導入し、英語による第2外国語学習の実践に取り組み、その効果を探る。
 - 幼小中と養護学校との交流を行い、豊かな人間関係を育てる。
 - 養護学校との連携により、各教科学習指導における学習不振・学習困難児・学習障害(LD児)の指導法をさぐる。

■ 共通学習(必修教科)について

◆国語 「生きてはたらく言語の力を育む12年間の国語科学習」

国語科では、幼、小、中の12年間の一貫した国語科学習において、「生きてはたらく言語の力」を育成することをねらいとしている。「生きてはたらく言語の力」とは、実の場において、話し、聞き、書き、読むことができる力、豊かな言語を獲得しながら、自己の世界を広げ、他と交信、共有し、自己を確立していく力であると考えている。その力を育成するために、12年間の円滑な発達段階をふまえた指導内容の再編、系統的・継続的なカリキュラムの開発およびその支援と評価について研究を進めている。

- 12年間の教育課程の中で培いたい力の分析、吟味
 - ・普遍的・客観的で共有化可能な力として
 - ・言語活動の目的に応じた力として……「正確さ」「豊かさ」「社会性」
- カリキュラム再編の視点の吟味

・言語活動の系統、言語能力の配列という視点からの見直し

○モデルカリキュラムの開発、実施、検討、修正

◆社会 「発達段階に応じた社会科学習のあり方 - 小・中の認知の差異や指導法の明確化とカリキュラム作成の視点 -」



←小・中連携による聖徳太子の授業風景

小・中の社会科の内容には難易の差こそあれ共通する内容が多い。しかし、内容に対するねらいが抽象的であるため教師の指導のあり方へ反映されにくい部分がある。そこで重複部分の多い歴史領域に焦点を当て、子どもの発達段階に応じ、小・中におけるねらいの適切さを見極め、明確化を図っていくとともにそれに即した教材化の視点づくりや指導法の研究を進め、地理・公民領域にも広げていきたいと考えている。

1 歴史意識の妥当性の吟味

藤井千之助氏の歴史意識の分析を、実践を通して子どもの実態から分析し、その仮説を修正する。

2 指導法の差異における子供意識の吟味比較を可能にするため、小学校6年生（H12,13）と中学校1年生（H13,14）において共通単元で実施する。

◆数学 「算数・数学教育における『生きる力』を培う教育課程および指導法の開発 - 数学的な見方や考え方の視点から -」



←実際におうぎ形に切ってみよう

数学科では、算数・数学における「生きる力」を「身に付けた知識をもとに、自分でその内容をどれだけ進められるか。それができる力。」ととらえている。この力をつけるには、これまでのように基礎的・基本的な知識・技能の習得は欠かせない。しかし、ただ単に知っているとか、覚えているだけではなく、それらが生きて働く力としてふに落ちてなければ意味はない。そして、そのとき活用されるのが、「数学的な見方や考え方」である。そこで、この見方や考え方の育成の面から、幼・小・中の発達段階を視野において教育課程をもう一度見直し、一貫したカリキュラムとして改良できるところを見つけていきたいと考えている。

12年度は、「関数」の内容について研究や実践を進めた。13年度はそれに加えて、「図形」の内容についての研究を進めている。

◆理科 「科学的に学ぶ力の育成～サイエンスデーの設定と実施、そしてその効果について～」



←特別カリキュラム「サイエンスデー」での活動風景

理科では、幼稚園、小学校、中学校の自然に関する指導の一貫性を求めて、特に「科学的に学ぶ力の育成」という視点から研究を進めている。児童・生徒の実態をアンケート等からとらえると、校種・学年が進むにつれて理科ぎらい・理科離れが進む傾向がみられる。幼稚園時には自然に対してよく親しみ、好奇心いっぱいに活動していた子どもが、いつからか自然への興味・関心を薄れさせている。その原因は何なのかを明らかにしながら、求めたい力の育成にはどのような新しいシステムや工夫が必要なのかを探っていこうと考えた。

そこで、次の2つの方向からのアプローチを継続実践している。

1 実生活と結びつき、科学することの楽しさや意義を実感できる幼・小・中一貫した新しい理科カリキュラムの編成と指導の工夫

2 自然体験・五感体験を中心とした特別カリキュラム「サイエンスデー」の設定と実施、そしてその効果についての分析

◆音楽 「いま味わわせたい音楽活動の喜び」

小学校・中学校の音楽科のねらいは、ほぼ同じである。本校では学園の特性を生かして、幼稚園も含めた1・2年間を意識した指導の一貫性を探っていくことが有効であるといえる。音楽科では育てたい力を、本学園での学習指導の実際と、教材観・指導観を合わせて見直しながら、次のように考えた。

音楽学習の中で『音楽活動の喜び』を味わわせることは、活動に向かう意欲となり、生涯にわたって音楽を愛好する心情のもとになる。そのために、多様な「音」や「音楽」に対する興味関心を広げ、生徒の「感じる力＝共有する喜び（聴いてその良さや美しさを味わうこと）」を伸ばす場面を小・中の授業の中で多く設定することにした。さらに、音楽の感動は人との関わりの中でより豊かになるものである。『自分と「音・音楽」』の視点に加えて、『（その自分と音・音楽を取り巻く）人』の存在を意識させていくことで、音楽学習の喜びが増し、その体験の連続がより豊かな学び・情操へつながっていくだろうと考えた。

◆美術 「図画工作・美術の教育課程・指導方法の研究開発」



←「光と影で遊ぼう」授業風景

本研究は、造形的な創造活動の喜びを実感することのできる幼児、児童、生徒を育てるために、図画工作・美術科における幼・小・中の段差や学習指導要領を分析する。さらにその分析をもとにして、幼・小・中の段差をなめらかにし、12年間が一貫したものになるように、目標や内容の再編を図り、カリキュラムを作成し、実践する。また、段差をなめらかにする指導法についても研究開発していくとしている。

現在、小・中相互の授業研究や生徒のアンケートから、小学校と中学校の指導観や指導法の特徴を分析し、児童・生徒がスムーズに小学校から中学校へと移行できるように、カリキュラムを編成しているところである。1学期は、中学1年生の学習の中に、造形遊び的な要素を取り入れ、光と影の特性を生かし、身近にあるものを使って造形する「光と影で遊ぼう」の授業実践を行った。

◆保健体育 「運動・身体・人へのかかわりを創造する（保健）体育学習」



←中3と小3による合同授業

体育科では、「生きる力」を「明るく豊かで活力あるスポーツライフを生涯にわたって営んでいこうとする力」と捉えた。そして1.生涯スポーツの基盤作り、2.健康作り（心と体の育成）の2つの視点を絡めながら、更に普段の授業を通して感じる幼児・児童・生徒たちの実態を加味して、それらを充実させるためのカリキュラムを開発し、それに基づいて研究を進めていく。

- ・生徒の実態調査と分析
- ・体育科授業の問題点の分析
- ・各領域における1・2年間の目標マトリックスの作成
- ・幼小中一貫年間計画の作成
- ・校種を越えた異学年間での交流学習の実施

◆技術・家庭科 「かかわりを実感し、主体的に生活を創造する技術・家庭科学習」



←間伐材を使用したペンスタンドの製作

技術・家庭科教育に求められる生涯学習の基礎となる力は、生活体験を見つめ直し問題点を解決することの良さや喜びを実感しながら価値観を形成し、生涯にわたり自己の生活をより良く豊かに改善していく意欲や態度を追究することである。そのために、生徒が自分の生活に結びつけて学習できるように、実践的・体験的な学習活動を展開することが重要である。

- ・身につけさせたい力の分析と系統性の整理
- ・小学校における指導内容との関連を図った題材等の配列
- ・小・中の児童・生徒の実態や指導内容に応じた指導法とその評価
- ・技術科では、小学校のものづくりの内容との関連を図ったカリキュラムを構想と実践
- ・家庭科では、食生活を中心として、生活を総合的に捉えられるカリキュラムを構想と実践

◆英語 「実践的コミュニケーション能力を培う英語教育」



←ホームステイ体験調査

近年、世界経済の相互依存や海外旅行者の増大など急激な国際化の中で、外国語習得のニーズが拡大している。そこで、時代が求める実践的コミュニケーション能力を育成するために、幼稚園や小学校にもALTとのふれあいを導入し、小学校1年生からの英語科指導を基礎としながら、小・中一貫性のある英語カリキュラムを構築していくと考えている。英語部会では、中学校の学習指導要領に示されている目標を「中学3年生が海外でホームステイを楽しめる英語コミュニケーション能力を身に付けること」と具体的に設定し、その仮説をもって小・中学校での指導カリキュラムを開発していくことを目標としている。今夏、中学3年生をニュージーランドでのホームステイ体験に派遣し、実際の場面でどの程度英語を聞き、話すことができるのか調査を行った。そこで、今後必要とされている英語力について分析・考察し、どのような英語指導が必要か、目標の一層の具体化や指導内容や方法などカリキュラムの改善に役立てて行きたいと考えている。

◆学校保健 「生涯にわたって、自ら健康なライフスタイルを確立するには 一人とのかかわりの中での、健康づくりー」

自らが人ととの関係を作っていくことは、ヘルスプロモーションの理念にそって多くの支援を受ける健康づくりをめざすことになり、今、その実践力の育成と生活化が求められている。

今回の幼小中の一貫教育で、時代の求める「生きる力を持った個性豊かな幼児・児童・生徒の育成」のための健康教育とはどういうものか、養護教諭・保健室という視点から、子どもたちの健康問題や生活実態を見直し、学習指導要領との関連性をおさえることから考

えていきたい。

13年度の研究としては、保健学習での「応急手当」の単元時にT・Tの形で授業に参加した関係から「けがに関する指導」と、養護教諭の日常執務の中で、かなりの時間を費やしている「心の健康に関する指導」を取り上げたい。

養護教諭の専門性とは何かと改めて自問したとき、今、それは子どもの健康を大事に思う気持ちであり、それが保健室での仕事とうまく対応し、職務の特質を生かせることができると再認識している。人とのかかわりの中で自己を振り返ることができ、健康であることのよさを感じ取れるような実践をしていきたい

■ 選択教科について

本校はこれまで、選択教科として合科型自由学習を実施し、多くの成果を残してきた。合科型自由学習は、2つの教科が一緒にあって共通のテーマを設定し、8つの講座を開設して通年制で実施してきた。13年度は、来年度から完全実施される新しい指導要領の趣旨に基づいて、合科ではなく単独の教科で選択教科を実施している。この学習は、前期、後期の半期完結型で、2年生は前期は国、社、数、理、英から、後期は音、美、保育、技、家から週1時間ずつ選択できるようになっている。また3年生は前期・後期とも週2時間、I(国、社、数、理、外国語)とII(音、美、保育、技、家)から選択できるようになっている。本年度の選択教科の内容は下記に示す通りである。3年生の外国語は前期はスペイン語、後期は中国語を選択できるようになっている。また、例えば2年生の前期に国語の「あなたがつくる童話の世界」を選んだ生徒が、後期に美術の「絵本をつくろう」を選ぶと自分のつくった童話を絵本にすることができるといった、これまでの合科型自由学習の成果が生かされるような選択の仕方も可能なように設定されている内容もあり、半期ごとに生徒が計画的に教科を選択できるように工夫している。

- 平成13年度の選択教科の内容（2年・前期5教科・後期5教科）
- 平成13年度の選択教科の内容（3年・前期5教科・後期5教科）

◆ 2年選択（国語） 「あなたがつくる童話の世界 -おはなし・おはなし・読み聞かせ-」

この選択学習では、6歳前後の子どもたちを対象に、自分が伝えたい思いを込め、語って聞かせる童話を創作する。聞き手、読み手である子どもたちが幸せであたたかい気持ちになれる世界を、自分自身の言葉で創造し描いてみることで、自己の世界を深め、広げ、見つめることをねらいとしている。また、創作した童話の読み聞かせを行うことで、音声と文字の両面から豊かな表現力を育成したいと考えている。

絵本に込めた自分の思いをうまく伝えるためには、登場人物の設定、ストーリーの展開、表現方法などを工夫することが必要であり、自分とは異なる言語環境、言語認識をもった相手を十分意識したうえで吟味しなければならない。これまでの学習では、まず身近にある童話を読みながら、自分の描きたい世界のイメージをもち、登場人物やストーリーの展開を考えていった。そして自分で制作したアコードィオンブックに自分の思いを込めた童話を創作していった。この後、読み聞かせの練習をして、テープに収録する予定である。また、後期の美術の選択学習では、この童話に挿絵を描いて絵本として完成することも可能である。

◆ 2年選択（社会） 「恩讐の彼方に』から江戸・大正再発見 一文学作家の生きた時代を探ろう一」

郷土讀岐が生んだ菊池寛は、近代・現代の文学者の一人である。彼の代表的作品の中に『恩讐の彼方に』がある。彼はこの作品を創作することによって、そのころの封建的な思想を打ち破るために努めていたのかもしれません。作品から見える江戸時代や、彼が生き作品に描いた大正時代ってどんな時代だったのだろうか。そこで、その当時の社会や生活のようすを調べ、リアルに再認識することで、『恩讐の彼方に』をより深く豊かに読むことができると考えた。また、郷土の文学者であり、郷土の文化を知るうえで意義深く、フィールド学習も可能であり、文学作品への愛情やその歴史的背景に興味・関心をもって探ろうとする態度が養えると考えている。

◆ 2年選択（数学） 「数学マジックの種あかしに挑戦」



←生徒が作成したマジックノート

「えっ！なぜ？」と私たちを惹きつけるマジックは、その『種』をあかすことにも大きな魅力がある。本選択学習では、そんなマジックと同じように、「数学」に関するマジックを紹介し、その種あかしに挑戦し生徒は、「数当て」の不思議をはじめ、「図形消滅」の視覚的トリックや「曜日当て」のきまりなどをみつけようと一生懸命に取り組んでいる。自らの力で種をあかせた生徒は満足げに友だち相手にマジックをして見せたり、いきづまった生徒は友だちの説明に真剣に耳を傾けたり、なんとかその種あかしにたどり着こうとしている。

また、種あかしができたマジックは、「マジックの手法」や「種」を自分の言葉でノートにまとめることにした。生徒は、だれにでも分かるようにノートに表現することに苦労していたが、回数を重ねるたびに、図や文字を使いつながら工夫してまとめられるようになった。この選択学習が終わった後も、自分で新たに見つけた数学マジックがノートに増えていくことを期待している。

◆ 2年選択（理科） 「あなたは、Future City プログラマー！」



←ある生徒の作成途中の未来都市

本選択学習により、今の地球がかかえる環境問題・自然保護という大きな課題を、自分たちの問題としてとらえ、解決していく方法を見いだし実践する態度を培うことが主たる目標である。そのために、パソコンソフトを利用し、その中の市長として都市開発を進めていく。都市づくりのテーマは、「自然との共生」である。生徒は、自然環境を大切にした住み心地の良い都市を計画的につくり、その過程で得た発見を他者に表現する。

市民は様々な希望や要求をもっている。自然災害も発生する。生徒は、ソフト中のそういう状況下で、すばらしいアイデアと判断力、行動力をもって開発に着手していく。そして、未来都市をプログラムし表現することで、未来を見つめ、自分は自然とどう共生していくのかを考えることができる。また、これまでの合科型自由学習の良さをいかした技術科や社会科などの学習につながる学びとし、自分の今の暮らしそのものを見つめ直すことができると考えている。

◆ 2 年選択（英語） 「W elco m e to 英語落語道場 一笑いの文化を発信しよう！」



←「英語落語」練習中

日本の伝統芸能である「落語」をささえているユーモアや笑いは、温かい人間味のある高度で質の高いものであり、その笑いは私たちをなごませ、幸せな気持ちにしてくれる。10年ほど前から落語と英語と一緒に楽しもうという「英語落語」が桂枝雀さんによって始まった。この選択学習では、「落語」を「表現・コミュニケーション」「笑いの文化」「想像力・創造性」といった視点から取り上げ、「落語」の世界を味わい、楽しみながら「言語文化」に目を向けたり、自己を開きながら英語で落語を工夫して表現したりしていこうとするものである。そして、人前で「英語落語」を演じることによって、より高い表現力やコミュニケーションの力を身につけることを目標としている。

10月にサンポート高松で行われる「かがわ国際交流フェア」に参加し、英語で落語を紹介したり、英語落語を演じたりして香川に住む外国人の方々を温かい笑いで幸せな気持ちにさせたいと日々練習に励んでいる。

◆ 3 年選択I（国語科） 「修学旅行記をつくろう 一私たちの感動を伝えよう！」

本題材は、3年生が体験した修学旅行を保護者や後輩、または地域の人々に広く知らせることを目的とし、完成はCD-ROMに焼き付ける形をとる。（CD-ROMへ焼き付けていく過程及びパソコン処理については技術科選択学習と連携を図っている。）

内容は、写真映像に「タイトル」、「テロップ」、「アナウンス（文章及び音声）」の3領域を付加し、各見学地や活動を「感動」というキーワードに基づいて紹介するというものである。

この学習でのねらいは、国語科共通学習で養った基礎的・基本的言語能力を、映像とともにイメージ統合し、豊かに表現することにある。そこでは、「言語のもつ力」を十分意識させながら、上記3領域（感性〔直感〕的側面、情報伝達に関する側面、具体的に感動を伝える側面）にわたる、「言語のもつ力」の多様な働きや効果・効率等に気づかせていく。そして言語は、目的に応じて様々な表現形態を有しており、その使い手の感性によって巧みに、そして豊かに加工されていくものであることもあわせて実感させていくものとする。

◆ 3 年選択I（社会） 「ディスカバリー坂出 ー坂出の現代と過去をさぐるー」



←フィールド学習においてアンケート調査を行いお年寄りのお話を聞いている様子

何気なく眺めている毎日の風景。しかし、そこには先人の足跡や歴史が息づいている。これまで気づかなかったそのようなものを再発見する方法を知ることで、ふるさとの良さを見つけようとする態度を育成し、ふるさとを愛し、ふるさとをよくしようとする態度を培いたいと考えている。また、古地図や歴史的資料など江戸時代後期の資料やフィールド学習を通じて、地域のお年寄りなどのもっている体験を聞いたり、商店街でアンケートをとるなどし、先人の知恵やふるさとの良さの変化に気づく生徒を育成したい。

◆ 3 年選択I（数学） 「ピタゴラスの世界」

「数学離れ」とよく言われているが、その原因是、生徒が数学を単なる計算の練習や公式の活用、証明の記述など無味乾燥なものとしてとらえているからではないかと思われる。そこで、数学の歴史を学び、数学が生活から生まれ、何千年もの工夫が積み重ねられてきたものであることを感じて欲しいと考えた。それによって、人間の物語としてのおもしろさ、発想を知ることからの感動、考えることへの興味なども得られる。

学習の進め方としては、ピタゴラスについて「正多面体」「平方根」「ピタゴラスの定理」「伝記」「その他」の5つのテーマからひとつを選ばせた。そして、まず書物で、途中からインターネットも加えて自分で調べた内容を各自でまとめた。一学期には、それを一度目のまとめとして冊子にした。

今後数時間は、人物をさらに広げて二度目のまとめに取り組む予定である。生徒は、まだ学習していない内容の理解や調べ方の方

法など、いろいろと困りながら学習を進めてきた。その苦労も含め、自分の調べたことに学習の手応えを感じている様子である。

◆ 3 年選択I（理科） 「自然の造形美を再現しよう」

自然界には、さまざまな「美」が存在している。建物の壁や家具等でよく利用されている「木目」は、もっとも身近な「自然の造形美」と言えるだろう。その「木目」は、長い年月をかけて、あたたかい時期と寒い時期を交互に生きてきたことにより構成されたものである。また、動物や植物のからだを形作っている各部分は、規則正しい模様の連続であったり、共通する部分を持ちながら少しずつ変化していったりするなど、何気ないようなところで、思わず目をみはるような「美」が存在している。このように、自然には、とても複雑であったり、壮大なものであったりして、人の手ではとても再現することが困難な「美」で構成されているものもある。

そのような、自然の造形美を、科学的な視点で観察し、自然の造形の巧みさについて研究し、自分の手でその「造形美」を再現する活動を通して、新たな発見や、気づきなどを認識し他者に伝えていこうとするものである。

◆ 3 年選択I（外国語） 「!Viva Espa 願ol ! –英語で学ぶ基礎スペイン語講座–」



←英語とスペイン語で地球を歩こう！

小学校において英語教育が本格的に実践されるようになった場合、中学校の外国語教育はどのように変わらのか。その疑問に対する答えの1つが、本選択教科である。授業はすべて英語とスペイン語で行われ、日本語が使われることはない。生徒たちは身につけた英語能力を駆使しながら、基礎的なスペイン語学習を楽しむ。スペイン語の授業でありながら、実は英語による実践的なコミュニケーションの場を提供しているのである。これほど現実的な目的のために自然に英語を使用する学習は、日本の言語教育においてこれまで実践されたことはなかったのではないだろうか。

スペイン語でスタートした本校の多言語教育には、次のようなねらいも込められている。つまり、英語に加えスペイン語を学習することにより、生徒は自己の「言語や文化に対する関心をより高く、コミュニケーションを図ろうとする態度をよりたくましく育てる」ことができるのではないか。さらに自己の「言語能力を的確に見つめ、言語学習のための学習ストラテジーを確立する」ことができるのではないかという2つの期待である。半期の学習を終えたところであるが、本選択教科で生徒たちが得た充実感は、予想を越えとても大きかったようである。後期には、同じねらいのもと中国語の指導を計画している。

◆ 3 年選択II（音楽） 「作曲（創作）を楽しもう」



←個人創作の様子

「メロディを創る」、「ハーモニーをつける」、そこには、想像以上の楽しみがある。本選択教科で、生徒はその楽しさに触れることができる。個人創作を主として、何かに出会い、心が動いたときの感動やその様子を表現したり、音楽として表出することで心がいやされるような曲創りに挑戦したりしながら、日常の生活体験や学習成果を生かそうということが目的である。

従来音楽科では、創作活動を共通学習IIの活動として位置づけ、教材開発を行ってきた。しかし、授業時数の削減によって、必修教科の時数の中では、従来共通学習Iとして取り上げていた表現・鑑賞活動を中心にし充実を図ることにした。それと同時に、選択教科の時間には、かつて共通学習IIで取りあげてきた、課題追究および発展的な学習を設定することにした。創作手段は、個人で選択する。現在は、ギター、ウクレレ、キーボード等の楽器およびコンピュータが選ばれている。完成作品は、後期選択体育の「イメージに合ったダンスを創ろう」と連携させることも可能であり、本校で平成12年度まで行ってきた合科型自由学習「音楽・体育」の良さを味わえるユニットとしてもとらえることができる。

◆ 3 年選択II（美術） 「絵巻をつくろう」



←絵巻の作品例

絵巻は、横長の巻物に絵を描き、多くは説明の文章も加えて、右から左へとくりひろげながら鑑賞する独特の絵画作品で、古い時代のアニメーションとも言われている。この学習は、自分史、伝説、文学、人物、自然、オリジナルの各コースの中からテーマを設定し絵巻の制作をする。前期・後期とも同じ講座を設定する。半期完結で、後期は、前期に選択I社会科で「ディスカバリー坂出」を選んだ生徒が、学習したことをもとに絵巻を制作するコースも設定する。

- ・自分でテーマを設定し、完成までを見通して構想をまとめることができる。
- ・描く内容に応じて用具や技法を選び、その特性を生かして効果的に表現することができる。
- ・文化遺産としての絵巻に興味をもち、その美しさやを味わうとともに、作者の表現の工夫点を理解することができる。

◆ 3 年選択II（保健） 「世界の遊びを体験しよう」



←オクトパス体験学習

スポーツの語源は、deport（楽しみ、娯楽、気分転換）＝遊びである。元来は遊びとして根付いていたものに、歴史の流れと共にルール・社会背景などが加わり、今現在では遊びの域を越えた競争色の強いものに発展しつつあるのも事実である。昨年度までの合科型（社会・保健）では、「世界国技大全」という学習を通して、世界の国技・民族スポーツに触れる機会を得た。それぞれの未知なるスポーツに触れ、それを体験する過程で「世界の子どもたちは一体どんな遊びをしているのか？」という1つの疑問にぶつかった。今年の学習は過去の学習経験を生かしつつ、スポーツの本来の姿である遊びに視点を当て、世界の遊びについて調べ、またそれを体験・検証することを学習のねらいとしている。

◆3年選択II（技術） 「私たちからはじまる情報発信」

21世紀の情報化社会の中で生きぬくためには、自分に必要な情報を取り入れ、それをもとにさまざまな情報と組み合わせて表現する能力が重要である。アメリカのある高校では、「ブロードキャスト」という授業で、毎日10分間程度、学校のトピックスを地域のケーブルテレビから発信している。

この学習では修学旅行記をマルチメディア機器を使って編集し、広く発信することを目的としている。そのために、テレビCMとニュースを比較し、どのように表現すれば自分たちの考えがうまく伝わるかを友達と吟味しながら、情報発信することの楽しさや意義を実感させたいと考えている。

そこで今年度は次のような点に留意して学習を進めてきた。

- ・制作意図にあった情報を主体的に集め、効果的に表現できる情報活用能力の育成
- ・編集するうえで必要な基本的な機器操作の技能向上のための支援
- ・ビデオテープとWebページで編集する2つのグループを編成し、学習集団と個の学びを活性化
- ・国語科の選択学習（画面のカット割りやシナリオ）と連携した2つの教科からの支援

◆3年選択II（家庭） 「郷土料理を調べよう」



←郷土料理

本選択学習では、自分の住んでいる郷土に興味関心を持ち、その土地の風土の中で長い年月をかけて育ててきた郷土料理を調べることによって、その土地ならではの食材と、その食材にふさわしい食べ方があることを知り、それらを次の世代へ伝える橋渡しになればと考えた。

学習のねらいは、次の2点を考えた。

1. 郷土料理の何について調べるか課題を自分で決め、調べたことをまとめて発表する。
2. 郷土の特性を知り受け継がれてきた伝統にふれ、さらに伝えていく大切さを知る。

学習活動は、いろいろな手段で郷土料理を調べ、実際に作ってみたり、味わってみたりして郷土をよりよく知る。そして伝統の上に、現代風アレンジ料理などにチャレンジしてみてもよいと思っていて、最後に発表会をしようと考えている。